中国・内モンゴルの就学前教育における民族言語教育の展開

—通遼市の農村地域の幼稚園教育を中心に—

岩　明*

Education for Minority Languages in Preschool of the Inner Mongolia

— Preschool Education in Rural Area of Tongliao —

Yan Ming

はじめに

内モンゴル自治区は、1947年5月1日に成立し、中華人民共和国の少数民族自治区としては最も早い時期に成立した自治区である。土地総面積は118.3万平方キロメートルあり、全国の総面積の12.3%を占める。モンゴル族、漢族、満族、回族、朝鮮族、ダフール族などの多民族が住んでいる。自治区全人口約2470万人（2010年）のうち、内モンゴル族は約424万人で、全国の17.7%を占める。

内モンゴル自治区には漢民族が多数を占めているが、モンゴル族が主体になっている自治区である。内モンゴル自治区で通用している言語はモンゴル語と中国語である。モンゴル民族の多くは、モンゴル語を母語として使用しているが、特に都市部の居住者には、中国語を母語として使用しているものもいる。内モンゴル民族は、少数民族の中で唯一の自分のモンゴル言語教育を行っている。

漢民族が多数を占めている内モンゴル自治区では、モンゴル人のモンゴル語と漢語教育の選択が迫られてきた。これにより漢民族の影響力が増し、モンゴル民族言語教育を受けるモンゴル人が次第に減少するようになってきた。モンゴル民族学校では、モンゴル語以外の科目すべてで、漢語教育の内容をそのまま翻訳して使用しているということや、内モンゴル自治区では、モンゴル民族の伝統的な文化を活かす行事が減少していることなどが問題として浮上している。例えば、以前は、毎年1回、スム（役所）でのナーダム会（那达慕）が開かれていたので、各村の住民が家族と一緒に参加して非常ににぎやかであった。このナーダム会では、子どもと大人それぞれが参加するイベントがあり、さらに家族が一緒に参加するイベントもあった。モンゴル民族の伝統的な行事、民族風俗、民族文化を活かした活動であった。この行事活動を行うことを通して、子どもと大人、家族、地域、社会的、他民族の文化などのつながりが大切であると実感できた。こ

*大東文化大学大学院文学研究科
教育学専攻2014年度修了生

のような現状の中で、内モンゴルの就学前教育における民族言語教育の展開について考察することが重要な課題になっている。

本稿では、現代の内モンゴル自治区の就学前教育における民族言語教育の成立と展開について、多民族の共生と平等を標榜する中華人民共和国の少数民族政策との関わりから考察し、内モンゴルでの民族言語教育の実際を、通遼市の農村地域の幼稚園の課程内容と教科書の分析を通して明らかにすることを目的とする。内モンゴルでは、漢語教育の重視へと教育政策が向かう中で、民族言語、文化、行事、風俗などが喪失する危機に直面している。さらに、内モンゴルの幼稚園教育では自らの民族の言語、文化、風俗、行事などを理解し、多民族の文化、言語を学習し、他民族との相互理解を推奨し、各民族が継承する文化を学び合い共有することによって理解を深めることが、相互の共生のためにますます重要な課題になっている。

今日、内モンゴル自治区では、モンゴル言語の教育と漢語教育をめぐって問題が拡大している。モンゴル語教育は、影響力を失いつつあるような情況にある。このようなことを踏まえ、内モンゴル自治区通遼市の農村地域のM幼稚園教育の実践について考察し、モンゴル民族文化、言語、日常知識などが重視され、モンゴル人の漢語教育への考え方を取り戻す幼稚園教育の実際について考察する。

1　内モンゴルにおける就学前教育の成立と展開

(1) 内モンゴル民族幼稚園の現状分析

内モンゴル自治区の中心はフフホト市（呼和浩特市）である。1956年にフフホト市新城区でモンゴル幼稚園が建築された。当時は、内モンゴル自治区の模範の幼稚園であった。この園はフフホト市の高級幼稚園で、民族言語を受けるために開発された幼稚園である。この園は、内モンゴル民族の児童教育を中心とし、現在、14の学習クラスがあり、4クラスはモンゴル語のみであり、主に伝統民族にかかわる文化の知識を指導している。幼稚園には多くのモンゴル民族の児童が通っており、教師はモンゴル民族が80%以上であり、基本的に二言語で教育が行われている。

内モンゴル民族の言語文字で学習を受ける、フフホト市二級重点モンゴル寄宿制幼稚園は1982年にフフホト市でモンゴル民族幼稚園として建築された。この園は、民族幼児教育を中心とし、漢語教材とモンゴル語教材があり、モンゴル教材を自主教材として全園共同で開発された。この園で、モンゴル民族教職員は全教職員の90%以上であり、しかも二言語を話すことができる。現在、8つのモンゴルクラスがある。

フフホト市サイハン区で1986年にモンゴル幼稚園が建築され、面積は8000平方米である。この園は、年少、年中、年長と分かれ、モンゴル語のみのクラスは8クラスある。サイハン区幼稚園は環境創設が重視され、園内は緑色で、華やかで美しく整えられてい

る。市レベルでは最も良いと評価されモンゴル幼稚園である。

バヤンノール市のモンゴル幼稚園は1982年に建築された寄宿制幼稚園である。全園では、9の学習クラス、300人の幼児、43名の教師がいる。この園は一所美化、児童化、浄化、児童の喜愛、保護者が満足する市級規範園である。この園目標は、「一切が子どものため、子どもの幸福は我々の幸福である」ということである。同時に、「子どもの発展を志向し、一流の効果を目指す」という理念が掲げられている。

哈申格日勤の「中国内モンゴル自治区における民族語教育の現況」によれば、幼稚園は、1983年に開園した通遼市で最も規模が大きい市の重点幼稚園である。2004年10月まで、モンゴル族と漢族の子どもたちを合わせて、360人の子どもが通っており、年少、年中、年長で10クラスに分かれている。漢族の子どもたちに対して、「漢語、英語」の二言語教育がおこなわれており、モンゴル民族の子どもたちにすべてモンゴル語で授業がおこなわれている[1]。

都市部で育つ民族の子どもたちにとって、家庭や学校内で使われる民族語を除けば、周囲の言語環境は漢語が多く使われており、モンゴル幼稚園に入園児の多くは漢語環境で接していた。

(2) 内モンゴル民族の幼稚園の開園と入園児の状況

内モンゴル農村地域では「就学前教育三年行動計画」(2011年－2013年)の下で農村地域の子どもたちが幼稚園に入園することができた。内モンゴル全県で、2011年には共有27か所の幼稚園が開園され、入幼児(3歳－6歳)は8287人であった。入園年少率は98.7%、年長入園率は91.9%であった。保育員は349名で、幼児資格を持っている教師は163名で、専攻合格率は46.8%だった。就学前教育三年行動計画によれば、入幼児と入園率が以下のように表されている。

表1　就学前教育三年行動計画の報告(2011年－2013年)

年　号		2011年	2012年	2013年
就学前教育	在園幼児数(人)	1782	1898	1993
	就学三年入園率	75%	80%	86%

この表からみると、モンゴル民族の子どもたちの在園児と入園率が明らかに増加している。これは、内モンゴル自治区政府の「就学前教育三年行動計画」により、農村地域で幼稚園が建築されることができたからこそ、農村地域の子どもたちが幼稚園に通うことができたことを示している。このようなことをみると、中央政府と自治区政府からもモンゴル民族の文化が尊重されていることが確認できる。

2009年から2013年の民族教育の統計により幼稚園の学校数と在校生の分析を以下のように表として作成した。

まず、2009年－2010年の少数民族教育情況をみてみよう。

表2　少数民族教育情況（2009年－2010年）

指標名称	2009年	2010年	増減値	増減幅（%）
在校生数（人）	34083	36620	2537	7.44
幼稚園数（所）	126	177	51	40.48

この表から、少数民族言語で教育を受ける幼児が増加していることがわかる。同様に、幼稚園数も増加している。民族言語で教育を受ける率が上がっていることが明らかである。次は、2012年－2013年の少数民族教育情況の統計により、以下の表がみられる。

表3　少数民族教育情況（2012年－2013年）

指標名称	2012年	2013年	増減値	増減幅度（%）
在校生徒数（人）	46457	47663	1206	2.60
幼稚園数（所）	168	205	37	22.02

この二つの表から見ると、少数民族言語教育を受ける子どもが増加していることがわかる。このように、民族文化、歴史などの教育を受ける子どもが増え、民族文化に関心をもつことにもつながっている。

2　通遼市の農村地域のM幼稚園の課程内容と民族言語教育

従来、内モンゴル政府は、モンゴル語、民族文化などを十分に尊重してこなかった。例えば、都市の銀行で署名する際には、モンゴル語でなく漢語で書かなければならない。モンゴル人は、モンゴル語で教育を受けてきたのにもかかわらず、なぜ漢字で書けなければならないのか、という疑問が生じるようになった。しかも、係員は全て漢民族であった。また、日本に留学したモンゴル人で、日本で子どもを生み、地元に子どもの戸籍を入れる場合には、モンゴルの名前が長くとも漢語の四文字を超えてはいけないという制限があった。他国に留学した人々は、子どもの戸籍を入れることができなかった。このように中国社会では、モンゴル語は必ずしも歓迎されていない。中央政府は「平等民族」であることを強調するが、実態は異なっている。一方で、モンゴル人のモンゴル語に対する考え方も変化してきている。モンゴル語で教育を受けて中国社会に出ると、勉強してきたモンゴル語が社会に出てから役に立たないということで、モンゴル人は子どもに自分の母語や民族文化、歴史などを勉強させるよりも漢語教育を受けさせるようになった。漢語教育を受けた人がモンゴル語より社会的に有利で、就職率も高く、中国社会で

生活しやすいと考えるモンゴル人が増えてきた。このような事実がモンゴル自治区全体に広がり、農村地域で学校も合併され、モンゴル民族言語、文字、文化、歴史にも大きな影響を与えた。さらにはモンゴル民族言語や文化が軽視される状況になっている。

内モンゴル政府は、2011年に開かれた「就学前教育研究会」で、モンゴル民族の言語、文字、文化、歴史などが消滅の危機にあることに気づいた。このようなことを改善するために、政府は2011年－2013年に「就学前教育三年行動計画」を実施するようになった。この「三年行動計画」では、主に内モンゴル農村地域への幼稚園開発することが目的であった。今日まで農村地域には幼稚園がなかったが、これはモンゴル人の幼稚園教育への理解不足であった。この「三年行動計画」の下で開拓した通遼市の農村地域M幼稚園の事例を分析した。

内モンゴル自治区農村地域では、幼稚園教育に関してさまざまな教科書が民族生活に合わせて作られている。子どもたちの成長と言語を活かしたコミュニケーションというのは、幼稚園の教科書だけではなく、子どもたちの遊びの生活、家庭、友達同士などのさまざまな活動に参加し体験することによって学習されるものである。したがって、就学前教育での子どもたちのより良い成長を促すには、生活の中での言語コミュニケーションを活かした学習が大切になるのである。最後にM幼稚園教育からみた民族言語教育の展望を述べる。

(1) 通遼市の農村地域のM幼稚園の現状

M幼稚園は、内モンゴル自治区通遼市のソム（役所）に建築された。この幼稚園は、内モンゴル自治区政府による「就学前教育三年行動計画」(2010年－2013年）の下で、2013年5月に建築され、9月から園児の受け入れを開始した。入園児は満3歳から満6歳までとなっている。このソムにある幼稚園には25ヶ所の村の子どもたちが通っている。この園には寄宿舎が設置されていない。遠い所から通園する子どもたちは個人営業の家に寄宿している。昼食は園の食堂で食べられる。現在、この園で、90人の園児がいて、20人の幼児園教師がいる。内モンゴル自治区教育部の下で、全日制の幼児園教師と幼児の比率は1：5－1：7と定めている。または、子どもが、40人－45人のうち1人の調理師がいることになっている。

劉郷英の研究によれば[2]、幼児園教師は1950年代当初の法規上では「教養員」とされたが、1979年の法規上では「教養員（即ち幼児教師)」とされている。幼児園教師は1950年代当初から教員養成制度に基づいて養成されてきた。現在、幼児園教師は中等専門教育機関である幼児師範学校（普通師範学校に付設する幼児教師クラス、職業高校に付設する幼児教師クラスも含む）卒業以上の学歴が求められ、「教師資格条例」(1995年12月施行）に規定された「幼児園教師資格」を持つことが条件である。

M園では子どもの年齢により、三つ（年少、年中、年長）に分かれている。「幼稚園工作規程」によれば、年少クラスは20人－25人で、年中クラスは25人－30人、年長

クラスは30人－35人と定められている。ここでは、この幼児園の一日の活動の流れを下の表3に示した。

表3　M幼稚園の一日の活動の流れ

時　　間	活　動　内　容
7:50 － 8:10	保護者と一緒に登園する時間体
8:10 － 8:40	朝の健康を確認する
8:40 － 9:00	教育活動
9:00 － 9:10	お水を補給して、トイレを済ませて、手洗う
9:10 － 9:40	体操
9:40 － 10:00	お菓子を食べさせる
10:00 － 10:30	戸外活動を行う
10:30 － 11:00	自由な遊び
11:00 － 11:10	昼食前の準備、（トイレを済ませて、手洗いなど）
11:10 － 11:40	昼食（美味しく食べさせる）
11:40 － 12:00	食後の散歩
12:00 － 14:00	昼寝（冬の季節）
(12:00 － 14:30)	昼寝（夏の季節）
14:10 － 14:20	お水を補給する、トイレと手洗いなど
14:20 － 14:50	教育活動
14:50 － 15:10	果物を食べる
15:10 － 15:40	穏やかな活動を行う
15:40 － 16:00	帰る前の準備する
16:10 － 16:30	幼児を迎える

この園では、子どもの教育時間を延長することはできない。子どもたちが帰ったあと教師たちが、教室などの掃除をして、1週間ごとに教室内の風景と掲示板を全部変えることになっている。

園は週5日制で、金曜日の午後は親たちが子どもを迎えに来て、実家に帰る。

内モンゴル自治区教育部の就学前教育の制度によると、幼稚園での毎日の集団教育活動は5－6回となっている。この中で、年少は、毎回15分－20分の活動を行う、年中は20－25分で、年長は25－30分となっている。また、幼稚園では、英語や文字を教えたり、算数などの科目を勝手に教えてはならないと定められている。要するに、子どもに楽しく、活き活きした成長に主な力を入れている。

幼児園の主な活動は、音楽、詩、舞踏、道徳、絵、言語（年長）などである。また、年中、年長では、正確な礼儀、手工、子どもの物語、民族文化、ことわざなどを学ぶ。

用いられる言葉は、子どもが理解しやすく、覚えやすい言語で、混合語も使われている。幼稚園での「生活活動」、「遊び活動」、「教育活動」などは、基本的にモンゴル語で行なわれている。

中国の幼児教育の中心を占める農村幼児教育の質を向上させ、広範な農村幼児の存在と学習条件を改善させるために、中国の幼児教育界は、農村の幼児教育に一貫して大きな関心を寄せてきた。農村地域の幼児教育の質の向上には、農村の幼児園のカリキュラム改革が重要である。カリキュラムの編制では、就学前教育に重点を置き、総合教育の思想を指導方針として、分科を改めて総合科を取り入れた。具体的に、一年の四季と幾つかの大きな祝祭日と活動に主要課題を考案し、幼児の実生活に近づき、農村の特色を反映し、農村の自然と社会の資源を充分に利用した。このように幼児が自分の意思に基づいて、周りの環境に触れることができる教育内容の編制を目指すことである。

(2) 通遼市の農村地域のM幼稚園の課程内容

モンゴル民族幼稚園の科目は大きく分けると、言語、社会、芸術、健康、科学など5つにわかれている。これは「五大領域」[3]とも言われる。言語には、詩、児歌、物語、ことわざ、母語、伝説、社会には、民俗行事、儀式、記念日、礼儀、娯楽、芸術には、美術、娯楽などがある。健康には、生活習慣、心理健康、安全意識、科学面では、自然資源、自然現象、日常接触する科学的に技術などが含まれる。

ここで、この幼稚園で用いられる『モンゴル文化』の教科書について分析する。「モンゴル文化」という科目には遊牧民の住まいである「ゲル」が描かれている。これは子どもたちに遊牧民が昔の住んでいた住居の簡単な紹介である。しかも羊が描かれていることは遊牧民の大切な家畜である馬、駱駝、牛、羊、山羊（ヤギ）の5種類である、このいずれかを飼っているモンゴル民族の生活の現状を表すことである。遊牧民は飼っている家畜には美味しい草を食べさせるためにゲルを組立式にして、草原を求めて馬車や牛車に乗せて移動していた。ゲルは円形をしており、ドアは必ず南側に向けて建てる。ゲルには窓がない。遊牧民は草原や水を大切にする、即ち自然を大切する民族なのである。M幼稚園のモンゴル文化に関する教科書は以下のようになる。

『モンゴル文化』[4]

『モンゴル民族と精神』

『モンゴル民族と精神』では、次のように書かれている。「モンゴル民族は、悠久な民族文化、歴史を持つ、偉大で、かつ勇敢な民族である。その精神（威厳、元気）はチンギス・ハンが治めた政権時代の精神である。モンゴル民族が勇敢に奮闘する意志の象徴である。」教師は、この内容を子どもたちに物語を話すような方法で教えていた。子どもたちにチンギス・ハンの馬に乗って、アジア、ヨーロッパまで戦争したことを説明し、モンゴル民族というのは困難を避けない、勇気を持っているという内容であった。例えば、子どもたちが日常生活の中で、自分にできることは勇気を持って自分でやることとモンゴル民族の偉大な精神を持って、何事にも勇敢に奮闘することを学習させる。

民族の子どもたちにモンゴル民族の精神、勇敢、決心、賢い意志などを理解させることが目的であった。また、自分のことをよく理解するには、相手を理解することであることを知ることと同じなので、まずは、自分の民族文化を知った上で、他の民族文化を学ぶことも重要になるのである。そうすることで他民族の中にも自分たちと同じ民族文化の特徴（良さ）を知ることができるのである。

(3) M 幼稚園教育からみた民族言語教育の展望

内モンゴル自治区政府が農村地域に幼稚園を建築し、内モンゴル教育庁も各クラスの子どもたちに向けて、言語、物語、ことわざ、モンゴル文化、モンゴル芸術などのさまざまな教科書をモンゴル民族の日常生活、民族文化に合わせて作成した。内モンゴル農村地域の幼稚園教科書は、すべてモンゴル民族文化や日常生活のもとで作られた。漢語への翻訳はされていない。このようなことが、モンゴル人のモンゴル語教育に取り戻す考え方を少しずつでも変えることができる。今日、多くのモンゴル人は漢語教育が有利であると考えがちである一方で、内モンゴル自治区政府は、モンゴル民族幼稚園教育を重視し、モンゴル人が農村地域で開設したモンゴル幼稚園教育の意義を理解するようになっている。

内モンゴル人の漢語教育への関心の拡大は、中国社会では漢語教育が有利で、就職率が高く、生活がしやすく、将来の幅が広がるという意見が支配的であったことに由来している。現在では、モンゴルの親たちの希望に合わせた幼稚園ができたため、農村地域の親たちが子どもを地域のモンゴル幼稚園教育を受けさせる傾向がみられるようになってきた。農村の幼稚園は、寄宿舎となっている。これは幼い子どもにとって、良いことでもある。例えば、寄宿舎における子どもたちの自己管理や子ども同士のコミュニケーションを採る力を育てる起点にもなるからである。また、週１回、親が子どもを送迎することが親子の良い交流にもなっている。親は、子どもへの１週間の生活、子ども同士の遊び、教師の言うことを聞いているか、などを聞きながら送迎することから、親は子どもの１週間の成長、言葉使い、聞くこと、話すこと、見たこと、などのモンゴル語を生かす良い機会ともなっている。子どもにとっては、ただ幼稚園教育ではなく、親のモ

ンゴル語を生かした機会としても重要である。これらのことはモンゴル農村地域の幼稚園の特徴である。

M幼稚園教育にさまざまな民族文化的な科目があることは、モンゴル民族の親たちの希望にそうものである。しかし、親や教師たちは、子どもたちの遊びの体験を必ずしも重視していない。例えば、子どもたちは遊ぶことが大好きで、遊びをして、子ども同士のコミュニケーションを身につけさせるとか、言葉遣いとか、礼儀などを養うという考え方が不足している。教科書を教室の外の世界に関連づけて指導することも不足している。モンゴル農村地域の幼稚園では、体験できることが非常に少なく、子どもへの遊びの体験を広げることが課題としてあげられる。

具体的には、「今、子どもは何に興味・関心を持っているのか」「今、子どものどの部分が伸びようとしているか、育とうとしているのか」というように子どもをよくみて、よく理解する言語教育活動ができていないのである。M幼稚園教育では、今日の内モンゴル民族の就学前教育として、子どもたちの民族言語教育をめぐる学習環境の創造においてさまざまな課題に直面している。

内モンゴル民族の子どもたちの言語教育において、どのような課題が浮上しているのだろうか。実際には、就学前の子どもたちが民族言語を学校や日常生活の中で使用する活動が不足しているのである。子どもたちが民族言語に参加する活動、すなわち参加して、良い結果を出せる活動が不足しているのである。

内モンゴル民族教育では、子どもたちが民族言語に参加する活動が足りなかったために、子どもたちが民族言語を十分に習得できないということが問題として指摘できる。例えば、走ること、捕まること、ちゃんと立てること、躍り上がること、手足がすぐに動き出せない、やっていることと一致しないままに会話している子どもたちが増加している。また、怠ける、抵抗力が弱い、太りやすい、我慢できない、性格が情緒不安定など、将来の夢を持っていない子どもたちが増加している。

子どもたちが参加する活動として、身体活動と知識の活動が考えられる。身体活動とは、体操活動、労働など、身体を動かすことを中心とした活動を表す。知識の活動とは、文化、文字、文章、芸術などを表す。

民族地域は、子どもたちの遊びの生活化、人間関係を作り、生活とコミニューケーションなどの活動を行う場所を提供しなければならない。内モンゴル自治区では、学習に対する理解が不足している。子どもたちは、学校での学習だけで充分に成長できるとはいえないのである。さまざまな活動に参加し、体験することも学習の一部である。体験したことにより、そこから、何らかの新たなものを発見し、身に付けることもできる。体験したことにより、教師の指示を待つだけではなく、自ら探究することも生まれるのである。このようなことで、子どもたちに学習への興味を持たせ、学習に対する態度を変化させ、常に先に進むなどの行動力がみえると共に、子どもたちの個性を伸ばし、健康で思考力と勇気を持ち、物心がついた子どもを教育する必要がある。

今日、モンゴル民族農村地域の幼稚園教育では、子どもたちのモンゴル語に対する知識、思考力の低下に直面している。このような状況で、モンゴル民族の伝統的な活動を多く行い、子どもたちに参加させて、モンゴル語や伝統的な文化、歴史などの知識を自ら考え、知識を身につけることを教育することが求められている。

内モンゴル民族幼稚園や小学校、中学校で、例えば、歌、詩、芸術、文書、スピーチなどの活動をモンゴル語で行うことが重要になる。このような活動は、子どもたちの思考力を広げ、知識を身に付けさせるなどの良い効果が期待できる。

以上をまとめると、モンゴル民族の子ども自身に実際に存在している問題は、活動と活動を行う場所だけではなく、社会教育、家庭教育、伝統的な文化、生活習慣の教育、考える力の育成などの課題もある。このようなことが子どもたちの成長に大きな影響を与えている。このような事情で、モンゴル民族たち、教師、保護者皆が心を一つにして、子どもの成長にとって最善の方法を常に考え、改善することが必要である。また、子どもたちの要求や特徴に合わせ、時期に応じて、新たな方法を探究して、養成することも必要である。

おわりに

本稿では、中国・内モンゴルの就学前教育における民族言語の展開について、内モンゴルの言語教育政策と通遼市の農村地域M幼稚園教育を中心に検討した。特に、多民族の平等と共存を掲げる中国社会の中で、モンゴル民族の文化、言語教育、歴史、風俗習慣が就学前教育においてどのように実施されているのかについて、M幼稚園の実践の観点から明らかにした。具体的には、内モンゴル自治区の通遼市にある農村地域のM幼稚園の教育課程の内容とそこで使用されている教科書を分析し、民族言語に関する幼稚園の教育課程と実践を考察した。M幼稚園の教師たちは、11種類の教科書を使用している。M幼稚園教育の分析から浮かび上がるのは、民族言語が使用されている現状を理解し、民族言語教育を把握することが幼児の言語教育を考察するのに重要であるということである。なぜならば、民族言語は、その民族にしか使われない言葉だからである。人間は民族言語から離れて社会に存在することができない。民族言語と社会は密接な関係にあるのである。

一つの民族にとって、経済文化の発展をみるには、その民族の言語教育、文字、文化などと直接的に関係があるものとして理解することが重要である。その理由は、内モンゴル自治区の経済文化の発展が遅れていることの原因の一つが、民族言語教育の進行に問題があると考えられるからである。本稿では、モンゴル人の漢語教育を受けることや、自分の存在する民族を知ることと民族の経済文化の発展が遅れている現状を踏まえ、それらの問題を解決するには、モンゴル民族幼稚園で言語教育を発展させ、そして自分の

民族の存在を知ることが第一歩になるということを指摘した。

融合的、平等民族に基づく多民族文化を掲げる今日の中国社会において、内モンゴル民族も、民族の文化の価値を理解し尊重することを重視するようになってきている。民族教育の政策を実施することによって、民族の一員としての誇りを育むことは、中国多民族の社会の中で、互いに共存、競争し合い、優れた文化を吸収し合い、民族融合を進展させ、そして、民族地域の経済文化、国家の発展にも大きく貢献することになるだろう。M 幼稚園の実践に見られるように、農村地域のモンゴル人の民族文化、言語教育、歴史、風俗に対する尊重の感情を持つことが民族のアイデンティティの形成にとって極めて重要な課題になっている。これらの課題を遂行するためには、内モンゴル自治区政府、教育庁の指導の下で、農村地域の幼稚園が民族教育に対する関心を高めていくことが必要である。

それと同時に、中国の多民族社会で生活するには、単に自身の民族文化、歴史、風俗、言語教育を強調するだけでは、地域経済を発展させることができないことも事実である。したがって、中央政府のもとで内モンゴル民族が融合する社会においては、将来的に多民族が共存する社会に変化していくことが必要である。そのために、自分の民族の文化、歴史、言語教育、風俗を理解した上で、他の民族の言語や文化を学習し、相互の交流を拡大し、経済発展にも繋げることが必要となる。

本稿ではまず、内モンゴルの幼児教育における民族幼稚園の歴史的な成立と展開について考察した。内モンゴルの民族幼稚園の成立には、中央政府だけでなく、内モンゴル自治区政府も関与しているため、その普及が遅れたということを指摘した。内モンゴル民族の幼稚園教育において重要なのは、内モンゴル自治区の子どもたちの成長や学習のプロセスを、彼らの日常生活でのコミュニケーションから切り離さないことである。内モンゴル自治区での民族幼稚園の現状分析からみると、大都市部での幼稚園教育は進んでいたものの、農村地域での幼稚園教育は発展が遅かった。そこで、内モンゴル民族幼稚園が中国教育部の基本政策を踏襲しながらどのように制度化されていったのかを明らかにした。

その上で、2013 年頃の通遼市における農村地域 M 幼稚園の教育課程の変化について検討した。内モンゴル自治区では、モンゴル幼稚園教育の開園により、モンゴル民族人の幼稚園教育を重視し、通園する子どもたちが増えてきている。M 幼稚園では、2013 年度は園児数が 40 人ほどであったが、2014 年度には 90 人になっている。また、内モンゴル教育出版社と内モンゴル少年児童出版社が協力して、モンゴル幼稚園教育で使うモンゴル語の教科書を作成している。この頃の教科書は、モンゴル民族文化、歴史、伝統的な風俗、日常生活に関わるものを中心に独自に作成されたものであり、漢民族に関わるものや、漢民族の幼稚園の課程内容をそのまま翻訳したものではなくなっていた。M 幼稚園では、子どもと教師、教師同士、子どもの仲間同士での会話は、基本的にモンゴル語を使用している。なぜならば、通遼市のモンゴル人が会話の中に漢語の言葉を

使いやすくなっているからである。また、M幼稚園の子どもたちと教師の民族言語の使用の検討結果によれば、モンゴル語が非常に多く使用されてきたことが理解できる。

一方で、M幼稚園の教育では、教師が子どもたちに話し言葉の能力を高めることについての意識が必ずしも十分ではない。子どもたちにさまざまな教育活動を展開することを通じて、子どもたちの個性や関心などを広げ、それを教育実践に生かすことができるような教育方法を考案することが求められている。幼児期は、言語発達の重要な段階であり、良好な言語教育を提供する条件があれば、幼児の言語発達を促進させるだけでなく、幼児の話し言葉の能力も高めることに繋がる。このようなことを含め、教師たちは、教科書以外に日常生活でよく使われている言葉を教えることによって、子どもたちの新しい言葉の増加とともに、表現や知識を教えることができ、幼稚園言語教育は就学前児童に対して、全面的な発達を支援することができるものと考えられる。

注

1　哈申格日勤「中国内モンゴル自治区における民族語教育の現況」、鹿児島大学教育部、2007、p104

2　劉郷英「中国における乳幼児教育・保育の動向と保育者養成改革の現状と課題に関する研究」『福山市立大学、教育学部研究紀要』、2013年、p138

3　安梅琴「内モンゴル民族幼稚園における課程内容研究」、内モンゴル師範大学、修士論文2011年、p30

4　何学智『モンゴル文化』内モンゴル出版集団・内モンゴル少年児童出版社、2013年、p1

（2016年2月11日受理）